夢

momθωθ@ヤンデレ狂

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
夢って怖いよね。
初挑戦テイストの作品です。

目次

夢

夢を見た。
ふわふわと、ゆったりと墜ちていく夢。
屋上から飛び降りた私を、地面が待っている。
そんな夢。
ふかふかのお布団から落ちたところで目が覚めた。

私はどこでも眠ってしまう。
起きた時、自分がどこで寝てしまったのかわからない時もある。
朝、起きれない時もある。
独り暮らしだから、私を起こす人もいない。
ふわふわ漂うような、不思議な感覚の中で私は眠ってしまう。
起きなきゃ。嫌。まだ寝ていたい。
でも、起きなきゃ。寝てたい。
夢を見た。

屋上に私がもう一人いる夢。
もう一人の私はにこやかに手をふっている。
「さぁ、ずっと眠って。この身体は私のモノよ。」
起きなきゃ。起きなきゃ。起きなきゃ。起きなきゃ。起きなきゃ。起きなきゃっ！
もう一人の私はとんっと、私を突き落とす。
ふわふわと、ゆっくりと墜ちていく。

起きたら、先生が呆れた顔で私を見ていた。
ばしゃばしゃと水で顔を洗う。
なんで、こんなに眠いのだろう。
目の前の鏡を見つめると、鏡の中の私がにんまりと微笑った。
眠りたくない。
私はカフェインをとるようになった。
それでも、うとうとしてしまう。
夜、裁縫中にうとうとしてしまったせいで、針で左手の人指し指を突いてしまった。
ぷくっと紅い丸が広がり、つつっと指から滴り落ちる。
あぁ、なんて綺麗なんだろう。

眠くなり、針を落としてしまう。
気が付けば、自分の部屋のベッドに寝かされていた。
おかしい。
私を動かしたのはだれ？
ふと、鏡を見ると、にこやかに笑う私がいた。
「さぁ、その身体を頂戴。」
私は気を失うように、眠ってしまう。

また夢を見る。
もう一人の私が楽しそうに鏡を割る。
割れた鋭い欠片を手に持ち、くるりとこちらの方へ向くと
「じゃあね。身体、ありがとう。」

ぐさりと、私を刺した。
夢なのに痛い。
痛くて、痛くて。

目が覚める。

「あれ？」

全ての鏡が割れて、なくなっていた。
手のひらは傷だらけ。
鏡が割れたのは、夢の中でだったはずなのに…？
自分の身体に触れると、嫌になる程に冷たい。

まるで死者のような冷たさだ。

こんなの私じゃない。

私の身体はどこ？

私ノ身体ハドコ？

冷たい身体を抱き締めながら泣き出す。
私の身体をかえして。
かえして。かえして。かえして。
ドアが開き、もう一人の私がにんまりと笑う。
「ありがとう。これで…アナタは用済みよ。」
ぱたんとドアが閉まる。

私は立ち尽くした。

絶対に許さない。

目が覚めて、また夢を見ていた事に気が付く。
手のひらに傷なんてなかった。
鏡も割れていない。
ほっとして、鏡を見る。

「今度コソ、身体ヲ頂戴。」